

学生によるゼミ案内

～うちのゼミ紹介します！～

国際社会学部では、3年生からゼミを履修します。(注：指導教員が開講する専門演習が「本ゼミ」です。普段は「ゼミ」と呼びます) 教員の指導を受け、ゼミ仲間との議論を経ながら自分の研究を磨き、最後に卒業論文としてまとめることになります。

…といっても、ゼミの具体的なイメージがなかなか湧かない、という学生も多いのではないのでしょうか。そこで、既にゼミを経験した皆さんの先輩の声の一部を、ここに紹介します。ゼミ生の声から、ゼミの雰囲気を感じてみてください。



(地域社会研究コース 青木雅浩ゼミ)

本ゼミ最大の特徴は、卒業論文を書くためのノウハウを基礎から丁寧に学ぶことです。毎回の講義は、少人数でのディスカッション形式で行われます。担当の青木先生は、授業ごとに設定されたテーマについて私たちに考え、話し合う機会を多く設けて下さるため、自力で論理的な文章を書く力を養うことができます。ここでは、主に卒業論文を書くために必要な知識について話し合います。例えばどのように問いを設定すればよいのか、問題意識をどのように見つけばよいのか、先行研究はどのように発見し、何に気をつけて読めばよいのかなどです。これらは自力で解決するには難しい内容です。しかしこのゼミでは、学生同士で互いに意見を出し合うので、みんなでそれぞれの問題を解決していくことができます。青木先生も親身になって指導して下さいるため、イチからしっかりと卒業論文を書けるようになりたい方におすすめのゼミとなっております。

(地域社会研究コース 青山弘之ゼミ)

青山ゼミでは中東の事柄であれば何でも OK! という研究テーマに関してはとても自由なゼミです。授業内では本の輪読、それについてのプレゼンテーション、そこへの鋭い質問、そこから派生する議論を一連の流れとして年間を通して行います。また各々自分の興味関心がある事柄をプレゼンテーションでは発表するため、ほかのゼミのメンバーの発表を聞いて、中東の他の国や事柄にも興味を抱くことのできるため、「中東の探索」と「自身の興味の深堀」を両方できるのが魅力だと思います。さらに時折、ゼミの卒業生の方や青山先生のお知り合いの中東研究の専門家がゼミに来てくださり、ゼミに参加していただけることも！

さあ！ユーモラスな青山先生とその仲間とともに、広大な中東世界へその手を伸ばしてみませんか？ (赤塚大輝)

(地域社会研究コース 大石高典ゼミ)

大石ゼミは専攻地域にあまり偏りが無く、様々な語科の学生が所属しているため興味・関心も多様ですが、その中で共通するのは「フィールドワーク」という手法です。教育やジェンダー、労働、漁業、制作などテーマは全く異なっても、多くの学生が実際に何らかの現場に身を投じて調査したいという思いを持っています。3年次の春学期はフィールドワークに関連する書籍を輪読し、秋学期は各々の研究テーマについて発表と議論を重ねて深めていきます。フィールドになり得る場については、留学先はもちろんアルバイト先や地元の施設、特定の地域や組織など、その可能性は幅広く、自由度が高いのが大石ゼミの特徴だと思います。多様なメンバーがいるとゼミを通して今まで全く触れてこなかった物事について考えたり、自分とは異なる視点を知ったりと刺激を受けることも多いです。新たな発見によって有意義な時間になることと思います。(堤萌恵)

(地域社会研究コース 大鳥由香子ゼミ)

大鳥先生のゼミの特徴は、学生主導のディスカッションによって授業が進行するところです。まず課題文献に対して自分なりの疑問点をリストアップし、その疑問点をゼミにおいて投げかけます。そしてその疑問に対して他のゼミ生が異なる論点や観点を提示してくれるので、自分が課題文献を読んでいるときには予想もしなかった方向に議論が発展することもしばしばです。またゼミの一番のおすすめポイントは、宗教史、経済史、政治史など多岐にわたるアメリカ現代史のトピックの中から、学生の興味に合わせて授業で扱う文献を選んで下さるところです。先生は雑談ベースのカジュアルな個人面談を定期的開催して下さるのですが、その際にお伝えした自分の興味や関心に合わせて柔軟にゼミのトピックを変更して下さいます。そのため自分の好きなことをとことん究めたい人にオススメのゼミだと思います。(藤井里帆)

(地域社会研究コース 菊池陽子ゼミ)

こんにちは！菊池ゼミです！菊池ゼミでは、歴史を中心に東南アジア地域を探求することができます！先生はラオス史を専門とされており、ゼミでは論文や資料の輪読を通して東南アジア地域の歴史や文化を学びながら、先生がコメントされるラオスの事例や各専攻の学生のコメントと比較しつつ、東南アジア地域の歴史文化を比較考察し深く知ることができます！2022年度は、春に東南アジア地域の歴史文化を取り上げた文献を輪読して学びを深め、秋には『ナガラワッタ』という1930年代にカンボジアで発行された新聞の日本語訳を題材に、歴史的背景も加味しつつ、当時の報道のされ方や主張、生活のあり方を読み解きました。ゼミは東南アジア地域全域に広く触れていきますので、東南アジア地域外の専攻の方を含め、東南アジア地域に興味のある幅広い学生が集まっています！学生の研究テーマも様々で、楽しいゼミですので、東南アジア地域研究に興味のある方は是非！（大塚力）

(地域社会研究コース 久米順子ゼミ)

久米ゼミでは、最初は自由に選ぶ好きな題材について、そして徐々に卒論の執筆に向けて、担当回に行うプレゼンを通し、自分の興味関心とそれに対する理解を深めていきます。先生はご専門であるイベリア半島の中世美術史に留まらず、西洋美術史全般や建築・文化・音楽などと社会的な影響に造詣が深く、掘り下げや説明の甘かった箇所への質問や、魅力的で説得力のある切り口の補足、論理展開のバランス修正にも非常に助けになってくださいます。学生は美術・文化に関心が強い者が多く集まるものの、蓋を開けてみれば専攻言語・地域も様々で、興味関心も多岐に渡るからこそ、交流を通して思わぬ発想が生まれたり、新しい分野に触れたりできるのも魅力のひとつです。発表も卒論執筆もテーマに関する自由度が高く個人の裁量によるところは大きいですが、それに対する先生・学生からの反応は自分で向き合うだけでは得られない着眼点や膨らませ方をもたらしてくれます。(桜井七海)

(地域社会研究コース 倉田明子ゼミ)

倉田ゼミは「中国近代史、香港・南中国地域史」を中心に扱いますが、ゼミ生は中国語科だけでなくマレーシア語科や朝鮮語科などの学生もいます。というのも、“中華圏”というものを考えたとき、華僑・華人圏も含まれ、その範囲は外大の語科の括りよりもずっと広いので、地域研究コースでありながら語科を跨いで学生と交流することができます(することもあり)ます。また、一口に歴史といっても地域史、社会史、文化史など範囲が広く、ゼミ生の研究テーマも多岐に渡ります。そして、複雑難解な香港について、研究の第一線でご活躍なさる倉田先生から学ぶことができるこれ以上ない環境です。もちろん、倉田先生はご自身に馴染みのないテーマでも手厚くご指導くださるので、興味関心に応じてテーマを自由に設定することができます。優しく素敵な倉田先生のもとで、知の総合格闘技とも言える歴史学的アプローチに触れ、満足のいく卒論を書き上げたい方は是非お越しください！（中村情奈）

(地域社会研究コース 鈴木義一ゼミ)

ロシアを中心に旧ソ連圏を対象とした地域研究の手法を学ぶゼミです。ディシプリンは政治・経済・社会・国際関係など社会科学を軸にして多岐にわたり、また現代の諸問題と歴史的事象のどちらでも研究対象に選ぶことができます。授業では課題文献（実際に扱ったテーマは権威主義、経済システム、ナショナリズムなど）の輪読や、学生が自分の関心に合わせて収集した文献の発表、それらを基にした議論を行っています。ロシア語文献を読解して発表したこともありました。3年次秋学期からは徐々に卒論を見据えた作業が始まり、学期末には卒論の予行練習として12,000字程度の小論文を執筆します。こうした準備を踏まえて4年次には卒論執筆に取り組みます。現在、この地域はロシアによるウクライナ侵攻をはじめとして様々な問題や火種を抱えています。その現状や背景に興味を持ち理解を深めたい皆さんへ、鈴木ゼミは門を開いています。(椎名旺快)

(地域社会研究コース 巽由樹子ゼミ)

巽ゼミでは、主にロシア史やメディア史を学びますが、卒論のテーマはそれに限りません。例えばソ連・ロシアの芸術史、政策史、文学、宗教、ジェンダーなど、ゼミ生自身の関心分野に沿って研究を進めていくことができます。授業は、研究書を講読し、発表・議論を行う形式です。先進的な文献を扱うことも多く、最新の研究動向を知ることができます。議論の際には巽先生が背景の補足や問題点を的確に指摘してくださるので、資料を批判的に分析する力が身につくと思います。巽ゼミの特徴は、一次史料を扱う実践演習があることだと思います。3年秋学期時にソ連時代の大衆雑誌を読み解き、出版者の意図や購読者層について考察しました。メディア分析に必要な力が身につくだけでなく、実際に昔の雑誌を手にするこの感動を味わえます。ロシアに興味があるけど、まだどの分野に関心があるかわからないという方も大歓迎です。ゼミの雰囲気もとても和やかなのでおすすめです！（諸見里杏）

(地域社会研究コース 千葉敏之ゼミ)

私が千葉ゼミを通して得たものは、本気で学問に向き合ったという自信と、知ることの喜びだといえます。そしてその考えは卒業して5年が経った今も変わらないままです。千葉ゼミでは、毎講義に中世ヨーロッパ世界との新たな出会いがあります。そしてその出会いを最も喜び、最も真剣に向き合っているのは千葉先生といえるでしょう。ゼミ生はそんな先生の姿をみて、新たな知を得る機会は皆に平等に与えられていること、それから、純粋な知的探求の喜びを知ることになります。千葉ゼミを通して体得する、文献の読み方・史実の捉え方・考察の論じ方、すなわち歴史を自分なりに解釈する方法、その作法は生涯を通じてあなたの武器であり、新たな知という喜びをもたらす財産になります。卒業後、エレクトロニクス企業に勤め、現在は縁あって南米に暮らす私自身、新たな世界に触れる度にそのことを実感しています。是非あなたにも、自身の知的好奇心の赴くままに、先生と共に中世ヨーロッパ世界に没入する、そんな千葉ゼミでしかできない経験をしてほしいと思います。(中野遥香)

(地域社会研究コース 登利谷正人ゼミ)

南アジアは経済発展を続け、急速に市場が拡大しているブルーオーシャンです。登利谷ゼミで南アジアについて深く学び、日本と南アジアを繋ぐ国際人材を目指しませんか？私たちのゼミでは、主にパキスタンやアフガニスタン、インドを中心に、歴史、経済、文化など、様々なトピックを学生自身が選択しながら学びを深めることができます。日々のゼミ活動では、南アジアに関係のある論文や書籍を輪読し、先生の解説を参考にしながら議論を深めています。また、定期的に、ゼミ生自身が自由に選択したトピックについて相互発表会を実施しています。基本的に少人数のゼミで、先生と生徒の距離が近いことも特徴です！そのためゼミでの学びや卒業論文の方向性のみならず、私生活や履修に関する相談も気軽にできる環境です！私たちのゼミに入って、南アジアを共に楽しく学びましょう！ゼミ生一同、新たな仲間をお待ちしております！！

(東佑太、古田花梨)

(地域社会研究コース 藤井豪ゼミ)

藤井ゼミは朝鮮近現代史を扱うゼミですが、フェミニズムやマイノリティへの差別など、様々な関心を持つ学生が集まっています。ゼミでは、他者との対話の中で自分の考えを言語化することを大切にしています。毎週課題文献を読み討論を行います。何気ない会話から自分の考えが実は固定観念に満ちたもの、あるいは他者を無意識に傷つけるものであった、と気付く時があります。日本で朝鮮を語ることがタブー視される中、こうして自分の思考過程に向き合うことは「なぜ朝鮮に興味を持つのか」を問い直す機会になります。また、自分は他者とどう関われるかを自問自答し、そのための態度を養うことは、大学という枠を超えた自分の生き方を見つめることに繋がるでしょう。とはいえ、先生を交えて学食に行ったり、ゼミ旅行に行くなど、穏やかで楽しい雰囲気のゼミです(笑)

朝鮮史、日韓関係、フェミニズムなどに関心ある方、お待ちしております！(西山理子)

(地域社会研究コース 舛方周一郎ゼミ)

舛方ゼミの特徴は自身の興味がある研究テーマを、様々なバックグラウンドや興味関心を持つ仲間と議論を深めて突き詰められるところです。このゼミでは「ブラジル(ラテンアメリカ)を起点とした比較地域研究」を掲げていますが、扱うテーマは各々で大きく異なります。4期生はスペイン語科やポルトガル語科で構成されていますが、扱う地域はアメリカ、朝鮮、ベネズエラ=中国や、インドネシアなど多岐にわたります。3期生の先輩方も様々な語科の出身です。また個人によってテーマは大きく異なるものの、「地域研究は何のためにあるのか?」「その問題は善悪で片付けられるのか?」など物事、そして地域研究の根幹となる考え方もゼミを通して学んでいきます。こうした事柄を仲間と議論しながら、自身の研究につなげていきます。懇談会も定期的開催するなど雰囲気のいいゼミで、来年はゼミ合宿も再開できればと思います！舛方ゼミのホームページ masukata-seminar.org で普段のゼミの様子も公開しています。後輩の皆様の入ゼミをお待ちしてます！(向井シヨーン虎太郎)

(地域社会研究コース 宮田敏之ゼミ)

「モノから社会を見つめる」、この考えに惹かれて私は宮田ゼミに入りました。多様な文化や歴史の中で、独自の発展を遂げた東南アジアを紐解くため、宮田ゼミでは自分なりの「切り口」を大切にしています。例えば、カンボジアの伝統絹織物が世界で注目される実態を調べたり、日本の乳製品メーカーがタイで成功した背景を調べたり、他にもタイの映画産業やミャンマーの自動車産業などゼミ生の専攻と興味は様々です。ゼミでは、お互いの問題関心を大切に、文献収集、分析、論文執筆方法を学び、意見交換します。多様な地域・テーマを扱う中で、徐々に「問いを見つける力」や「地域に根差す視点・社会を俯瞰する視点」が身についたように思います。ゼミは和気あいあいとした温かい雰囲気、先生は一人ひとりにじっくり耳を傾けてくださいます。自分の興味を深掘りしたい、初歩から経済を考える力を養いたい、地域を通じて国際社会を俯瞰したい、そんな方にお勧めのゼミです！(野口垂依)

(地域社会研究コース 宮田敏之ゼミ)

宮田ゼミでは主に東南アジア経済について学びます。しかし一口に経済と言っても、理論や数式を学ぶわけではなく、東南アジアの歴史、政治、文化、社会情勢など、様々な切り口から経済動向を捉え議論を深めます。したがって、経済を一つの軸としつつも、ゼミ生の関心がある分野は多種多様です。私はタイのスマートシティ政策を卒業論文のテーマに掲げていましたが、ある人はタイの現代美術と企業メセナ（企業が芸術・文化活動を支援すること）の関係、ある人はインドネシア人の訪日観光をテーマとしていました。そのため、ゼミ生同士で互いのテーマについて議論を進めると、いつも新鮮な発見があり、自身のテーマについても形式や枠に捉われない研究を進めることができます。地域研究として、自身の関心のある地域について分野を問わず理解を深めたい人は、ぜひ宮田ゼミで一緒に勉強しましょう。(菊池峻汰)

(地域社会研究コース 山内由理子ゼミ)

「文化人類学・先住民研究・オセアニア地域研究」を掲げる山内ゼミですが、まずは『想像の共同体』などの古典と格闘することから始まります。①難しい言葉に惑わされず具体的に説明できること②わからなければどこがわからないのか説明できることを意識しながら、読解力・思考力を鍛えていきます。3年生を終える頃には、精読を通して養った「現代社会を批判的にみる」視点が、日常生活の様々な場面で生きることを実感できるはずです。卒論研究は、個別面談で先生からいただくアドバイスを指針に、各自で文献を探し、読んでいくのが基本になります。同時に、卒論の構想・進捗発表を通して他のゼミ生から新たな気付きを得られるので、自らの研究を多面的に見つめ直すことができます。じっくり、こつこつ、真摯に学問に取り組むのが山内ゼミです。学生の学びを全力でサポートして下さる先生と切磋琢磨できる仲間と共に、自らの「問い」に向き合ってみませんか？(山本万智)

(地域社会研究コース 山内由理子ゼミ)

3年生の時点では各自で予習をしてからゼミの時間に文献を読み進める形式のゼミです。難しい文献もあり予習に時間がかかることもありますが、分からない部分はゼミの時間で丁寧に時間をかけて進めてくださいます。私自身当ゼミに入ってから新しく学んだことがほとんどでしたが、様々な研究題目に共通するような概念や考え方について学習することができました。卒論について学生が考える機会をよく与えてくださるので卒論の書き方や計画の立て方まで3年生の時点で学ぶことができます。また、アットホームな雰囲気のでゼミなので卒論や進路のことについても質問しやすく山内先生も親身になって相談に乗ってくださいます。オセアニア地域や文化人類学に興味のある方に是非おすすめします。(田中菜生)

(現代世界論コース 小野寺拓也ゼミ)

小野寺ゼミでは2年間かけて自分の関心のあるテーマに取り組み、3年ゼミでは小論文、4年ゼミでは卒業論文にまとめます。ゼミ生は主にドイツ近現代史の中から、ナチ官僚・音楽・歴史教育・記念碑など関心のあるテーマを選びます。私は漠然と戦後ドイツに興味を持っていましたが、概説書を読むうちにそのテーマの基礎知識や論点がわかってきて、関心を絞っていきました。各自文献を調べ、読み進める作業をしながら、授業では歴史学での「問い」の立て方や論文のアウトラインの作り方などを学んでいきます。特に4年の春学期には『アンネの日記』を読み、そこからどのような「問い」を立てられるか、また論文にするとしたらどのような構成にすることができるかを考えるという面白い課題があります。授業以外で文献や自分の論文と向き合う時間を多く必要としますが、大学生活で学問に真摯に取り組んだという実感を持てると思います。(樋爪美波)

(現代世界論コース 田邊佳美ゼミ)

国際社会学と聞いて、どんなイメージが浮かびますか？ぱっと答えにくいかもしれません。例えば紛争のニュースを見聞きして、「現地の人は今、どんなふうにいるんだろう？例えば女性は？移民は？労働者は？」と考えたことがあるなら、本ゼミでの学びが合うのではと思います。ゼミ生はそれぞれ異なる問題関心を持っていますが、社会全体の大きな流れを掴みつつ、そこで生きる個々に目を向ける人が多いです。授業内容は文献購読とディスカッションが中心です。大きな特徴は二つ。一つ目はゼミ生の関心に合わせて文献が選ばれるところ。毎年多様な学生が集まりますが、先生がそれぞれに合ったテーマで本を用意してくれます。二つ目はディスカッションが盛んなところ。背景には安心して発言できる空気感があります。「自信がないな」と思いながら言ったことでも、先生をはじめとしたメンバーが真摯に受け止めてくれます。文献の分からなかった部分を皆で考えたり、内容に引き付けて自身の体験を共有したり、議論は多岐に渡ります。ピクニックや懇親会もあり、先生や先輩への相談もしやすい環境です。(Fさん)

(現代世界論コース 中山智香子ゼミ)

本ゼミでは「何が私を突き動かすのか」を徹底的に探求し、開示することが求められる。このグローバル社会の諸問題は常に複合的であり、学問の枠にとらわれずに手探りで問題と向き合わなければならない。既存のレンズにとらわれない自分なりの問題提起を、泥臭くみっともない姿を晒しながらも、直視し続け丹念に積み上げていく作業が不可欠である。具体的な活動として、まず三年次の春学期に基礎文献の輪読と並行し、複数名で論考を執筆する。それを土台に秋学期にはゼミ論文を個人で書く。そして四年次には集大成として卒業論文を完成させる。本ゼミの中で行うすべての活動には正解が無い。そのため周りの期待に応え、耳触りのいい言葉を並べる「いい子」は必要ない。比べられることも無ければ、良し悪しの評価をされることもない。そのような環境に身を置くことは、当然スリルを伴う。…が！！苦労と引き換えに得られるものは何物にも代えがたい。それは、もはや戦友と言えるような存在である。真摯に学問に向き合う中で生まれる友情は、まさに本ゼミでしか得ることができない。同期や中山先生はもちろん、上級生や院生、卒業生の愛の鞭を受けながら、ともにパトスを燃やせるすべての外大生を待ち望んでいる。(中村優太)

(現代世界論コース 真島一郎ゼミ)

“自分は世界のどこに立っているのか”という共通の問いのもと、様々な分野に関心を持つ学生が、それぞれのテーマについて思う存分思考を深めることが出来るゼミです。研究テーマは多様ですが、各自でただ黙々と論文執筆に取り組むというわけではありません。むしろ、ゼミ友同士で研究テーマを共有し、友のテーマも自分事として一緒に考え、自身も新たな視点にたどり着くというのが真島ゼミの大きな特徴です。毎年真島ゼミ生は、素敵なゼミ友との出会い、皆で一緒に励まし合いながら書き上げた論文に誇りを持って卒業していきます。私たちの身近に存在する“なにごとか”。そのままで、怒り、悲しみ、混乱し、考え、考え、考える…。そんな真島ゼミでの、日々を振り返るころ、以前の自分には想像もつかなかったような地点に立っていることでしょう。(文美友)

(現代世界論コース 梁英聖ゼミ)

「大学は、社会とは別の時間が流れている。それは、真理を探究する時間だ」——梁英聖先生がおっしゃったこの言葉は、梁ゼミを表す言葉としてもぴったりだと思います。ゼミでは、レイシズムと資本主義の関係を批判的に分析する思考力を身につけるため、古典を精読して社会理論を学びます。2022年度秋学期にはフォーコの『監獄の誕生』を読み、理解できるまで徹底的に教わりました。レジュメ作成や発表を積み重ねていく日々は、決して楽ではありません。しかし、普遍性を持つ理論を学ぶことは、社会の別のありかたを構想する上で必ず役立ちますし、どんな疑問にも真剣に向き合い丁寧に答えてくださる梁先生のもとでの学びは、とても楽しく、研究室には密度の濃い時間が流れています。知識や理論を、行動や実践に結びつけている梁先生の言葉は、鋭く、強く、優しいです。梁ゼミで、共に真理を探究し、「自分」という生の在り方を見つめ、創造してみませんか。(鳥倉捺央)

(国際関係コース 篠田英朗ゼミ)

私たち篠田ゼミでは平和構築について扱っています。平和構築？堅苦しくて難しそう…なんて思ったその貴方！篠田ゼミは先生のユーモア溢れるお喋りと個性豊かな同期や先輩に囲まれた暖かい空間です！先生は私たち学生に親身に寄り添ってくださり、進路相談だけでなく日常の悩み相談にも乗ってくださいます。同期や先輩との繋がりも強く、ゼミ合宿や食事会、就活体験談共有会も開催されています。研究テーマは平和構築のみに限定されておらず、昨年の卒業研究のテーマもクールジャパン政策や日本の経営からウクライナ侵略やイエメン内戦まで、一人一人の興味に応じて様々でした。3年生で扱うMECEやPCMは就職活動にも役立っています。もちろん国連文書読解や紛争分析手段学習も行います。省庁や独立行政法人を志す方にもおすすめの良いゼミで、先生がゼミ内で貴重な裏話を共有してくださいます。就職実績も良好です。篠田ゼミ一同、後輩のみなさんをお待ちしています！(伊吹玲緒)

(国際関係コース 武内進一ゼミ)

武内ゼミでは主に広義の「国際協力」を取り扱います。指導教員である武内教授は日本有数のアフリカ研究者ですので、アフリカへの関心が高く、かつ国際関係や開発といった切り口で学びを深めたい学生には持ってこいの学び場です。ざりとてアフリカ地域専攻の学生ばかりが集まっているわけでもありません。また、国際協力、国際政治、開発経済、安全保障など、ゼミ生の関心分野は十人十色です。だからこそ、自身にはない新たな観点で物事を発見できる可能性があります。そのために必要不可欠なことは、議論への積極的な参加です。学んだ事柄を自身の専攻地域に置き換えて考え、得られた気づきを意見として発信することがゼミにおいて重要な役割を担います(意外にもこれが難しいのですが)。何に対して質問・コメントをする心持ちで臨むと、あっと驚かされる発見が生まれることがあり、それこそがゼミという場で学ぶことの面白さであります。(山口天音)

(国際関係コース 松永泰行ゼミ)

「巨人の肩の上に立つ」という言葉をご存じでしょうか。ニュートンが用いたことでも有名なメタファー、先人たちの業績の上に現代の新たな知見や学問の進展が生まれることを意味しています。松永ゼミは、そうした知見に富む卒業論文を書くために巨人の肩を目指して登っていくようなところです。ゼミで扱うのは政治、社会、国際関係といったテーマで、毎学期のはじめにゼミ生の関心を聞いてから先生が決定します。一昨年の秋は Historical Institutionalism(歴史的制度主義)、昨年はポピュリズムや極右政党の台頭(春) とその背景にある社会・政治的構造(秋) でした。毎週新しい文献を読むため課題量は少なくありませんが、専門的な英語にも少しずつ慣れていき、学期末には確かな成長を感じることができます。また古典から最新のものまで様々な社会科学の理論との出会い、問題設定や手法からの学びもたくさんあります。先生の解説を通してその分野に関する知識を得るだけでなく、文献の中でどのような論理展開が行われているか分析する力をつけられることも魅力です。広く政治や国際的な事象に興味を持つみなさん、ぜひ松永ゼミと一緒に巨人の肩の上からの景色を望んでみませんか？(中村響)

*サブゼミとは？

本学では、指導教員とは別の教員が担当するゼミを履修することも可能です。このことを、通称「サブゼミ」と呼んでいます。皆さんの先輩の実体験から、サブゼミの利用法を見てみましょう(なお、全てのゼミがサブゼミを開講しているわけではありません。サブゼミを履修する際には、必ずその担当教員と事前に相談しましょう)。

私は本ゼミとして松隈先生の国際法ゼミに所属しながら、武内先生の国際協力論ゼミにサブゼミとして参加していました。理由は自身の関心分野がサブゼミの該当分野と被っていたからでした。サブゼミに参加することのメリットは、同じ問題を異なった視点から考えることが出来る点だと思います。私の場合、卒論のテーマとして「ルワンダ・ジェノサイドにおける裁判所の役割」を選び、現在執筆準備中です。本ゼミの授業では国際法の観点から、サブゼミの授業ではより政治学的な観点からこの問題を見つめることが出来ていると思います。また、当然他の履修生の視点もゼミごとに異なっているのでより広範囲の視点から自分の考えをブラッシュアップする機会を得ることが出来ます。このことにより、同じ事象を二つの面から捉え、より深みのある卒業論文が書けるのではないかと期待しています。(福島黎)

地域研究は、隣接地域や遠く離れた別の社会を含めて考察する場合があります。そこで役に立つのが、本学の「サブゼミ制度」です。私は、伊東先生の北西ヨーロッパ地域研究ゼミ(本ゼミ)と大鳥先生の北アメリカ地域研究ゼミ(サブゼミ)に所属していました。なぜかという、イギリスの大西洋横断客船(例えばタイタニック号など)に興味があったためです。これらは英米を結ぶため、イギリス史に加えてアメリカ史も知る必要があると考え、サブゼミを履修しました。課題が増えるため苦労はありますが、私は英米の歴史を学ぶ中で、両者を融合させた「大西洋史」という学問を知りました。そこで、客船という独自の観点がこの分野で応用できると気が付き、卒業論文を執筆しました。このように、複数地域を学ぶことで新しい視点を得られるため、地域を超えた興味関心を持つ方には、ぜひサブゼミ制度を活用してほしいと思います。(小林朗大)

本ゼミとして現代世界論コースの真島一郎先生のゼミに所属する傍ら、アフリカ地域研究の大石高典先生のゼミをサブゼミとして参加しています。希望指導教員を検討した際、真島先生にするか大石先生にするか悩み、せっかくなら選択しなかった先生のゼミをサブゼミとして履修しようと思ったからです。様々な興味を持つゼミ友たちと、それぞれの視点で世界の「夜」を検討する本ゼミの傍ら、自らの専門の文化人類学において重要となるフィールドワークを重視するサブゼミを受講することで、異なる視点からのアプローチ方法を学ぶことが出来ています。3年次の「ゼミ論」を本ゼミで執筆する際にも、サブゼミを通して多くの気づきを得ることが出来ました。ゼミ受講生の雰囲気もそれぞれで違うので、多くの仲間と出会えることもサブゼミを取ってよかったと思えることの一つです。マクロな視点とミクロな視点を得るために、別のコースのサブゼミ履修が良いと思います。(武藤幸)